

## ペルソナとヒュポスタシスの一考察

— トマス・アクィナス 『能力論』 q. 9, a. 1～2 —

飯 塚 知 敬

### A Consideration on *persona* and *hypostasis*

— Thomas Aquinas : *De potentia* q. 9, a. 1～2 —

Tomoyoshi IIZUKA

#### はじめに

トマス・アクィナスは『能力論』<sup>(1)</sup>第9問題で神のペルソナについて問題としている。ペルソナの定義について、トマスは基本的にボエチウスの『二つの自然について』における「理性的本性を有する個の実体」(*rationalis naturae individua substantia*)に従っている。この第9問題において、神におけるペルソナを問題とする前に、先ず第1項、第2項においてペルソナの基本的な概念内容を説明している。第1項、第2項における表題は次の通りである。

- 第1項 ペルソナは本質、自存体、ヒュポスタシスに対してどのような位置にあるか  
Quomodo se habeat persona ad essentiam, subsistentiam et hypostasim.  
第2項 ペルソナとは何か  
Quid sit persona.

トマスはこの箇所において、神、天使、人間に共通に当てはまるペルソナの概念の基本的な意味を明らかにしようとしているが、それをヒュポスタシス<sup>(2)</sup>の概念を解明することを通して行っている。トマスはギリシア語であるヒュポスタシスをラテン語で「個の実体」(*substantia individua*)とする。個の実体とは「自体的な能動」(*per se agere*)の基体となるものであるが、この「自体的な能動」の基体という性格は理性を有する存在者において最も適合する。それゆえペルソナは単に個の実体というだけでなく、さらに「理性的本性を持つ個の実体」(*hypostasis rationalis naturae*)と定義される。このようにトマスはペルソナの概念を基本的に自体的な能動の主体という観点から捉えていることが分かる。

しかしペルソナが自体的な能動の観点から捉えられ、従ってそれが「個の実体」であるとしたら、ペルソナを定義することはどのようにして可能なのか。個の実体はその個性に即して特殊であり、普遍性を欠き、従って定義することはできないのではないか。この疑

問を踏まえて、トマスは第2項においてペルソナの定義について取り上げている。トマスの説明においては「本性の存在形態」(modus existendi naturae)という概念が重要な働きをしていると考えられる。この小論では神におけるペルソナ論に先立って、先ずペルソナの一般的で基本的な意味について理解したい。そのため第1項において、トマスがペルソナをヒュポスタシス(個の実体)として捉えていることを見る。次に第2項において個の実体が更に「本性の存在形態」という側面から理解されることを見る。このようにしてトマスのペルソナ概念について基本的な理解を得たいと思う。

## 第一章 ヒュポスタシス(個の実体)としてのペルソナ

第1項において、トマスはペルソナをギリシア語のヒュポスタシス(個の実体)という言葉の解明を通して明らかにしようとしている。第1項の本文においてトマスは、ヒュポスタシスが先ず個の実体であるということを次のように説明する。

①実体は個物としての実体と、普遍としての実体に分けられる。

トマスは実体をアリストテレスの『形而上学』<sup>(3)</sup>における周知の二分法に従って区分する。

- ・第一は究極の基体(subiectum)であり、他者についてもはや述語付けられないものとしての実体である。これは実体の類における個物(particulare in genere substantiae)である。

- ・第二は基体の形相 forma ないし本性 natura であり、普遍としての実体である。

一つの本性を持つものに多数の基体が存在する。例えば人間という一つの本性を持つ多数の基体が存在している。この一なる共通の本性が、ものの何であるかを意味する定義の意味するところのものであり、この共通の本性が本質 essentia、あるいは何性 quidditasと言われる。

しかし個物の内にあるものの全てが本質の意味内容のうちに含まれてしまうわけではない。もしそうであれば個物相互の相違というものは消失してしまうはずである。共通の本性とは異なるものが、個的質料 materia individualis であり、これは個体化の原理といわれ、個的質料を限定する個的な付帯性である。

- ・本質は実体の形相的部分である。例えば人間性(humanitas)という本質とソクラテスという実体を比べてみると、「ソクラテス=人間性」という等式は成り立たない。人間性はソクラテスの形相的部分である。一般に形相と質料の合成体において、本質はその基体と同一ではない。「ソクラテスは人間性である」と言えないように、本質は基体について述語されない。

- ・単純体(simplex)においては本質は基体と同一である。単純体は質料を含まず、共通の本性を個体化する原理を持たない。本質は基体と同一であり、そこでは「本質=実体」が成立する。

②実体は自存し(subsistere)、基体となる(substare)という二面性を持つ。

- ・実体は自存する。実体はその内に支えられるといった外的な基盤を必要とはしていない。他者の内ではなく、自らによって存在する(per se existere)。

- ・実体は付帯性に対して基体となる。実体は付帯性に対してその基体となることでそれ自身が他者の基盤となる。

③実体とヒュポスタシスとは実在的には同一であり、概念的にのみ異なる。<sup>(4)</sup>

実体は自存するものとして、つまり *subsistentia* としてはギリシャ語の *ο υ σ τ ω σ ι σ* に対応する。また他者の基体となる限りで、つまり *substantia* として、あるいは第一実体としてはギリシャ語の *ὑ π ό σ τ α σ ι σ* (*hypostasis*) に対応する。ヒュポスタシスと実体とは実在的には同一であり、概念によってのみ異なる。つまり、ヒュポスタシスは実体の自存体という側面よりも、他者に対して基体となるという側面、第一実体としての側面を表示するとトマスは解釈する。従って、ヒュポスタシスは第一実体としての「個の実体」(*individua substantia*) という意味が出てくる。

④本質と実体とは、質料的物体においては実在的に同一ではない。単純体においては同一である。

本質は質料的物体において、実体の形相的部分である。従って、本質と実体とは実在的に同一ではなく、その一部である。<sup>(5)</sup> 単純物体においては、本質と実体とは実在的に同一であるが、概念的にのみ異なる。

⑤ペルソナは理性的本性のヒュポスタシスである。

ペルソナはヒュポスタシスに、ある限定された本性を付加する。つまり、ペルソナとは理性的本性のヒュポスタシスなのである。<sup>(6)</sup>

しかし第1異論でアウグスティヌスを引用して<sup>(7)</sup>言われているように、神についてペルソナが語られる場合にはギリシャ人は神の内に「三つのヒュポスタシス」を認め、ラテン人は「三つのペルソナ」を認めている。この場合はヒュポスタシス=ペルソナの関係が成立している。同時にこれまで見てきたようにヒュポスタシスのもとの意味は個の実体であり、それが理性的本性を持つかどうかには直接関係ない。この場合にはペルソナとヒュポスタシスとは等しくないことになる。

トマスは第2異論解答で次のように説明する。<sup>(8)</sup>ギリシャ語のヒュポスタシスはその言葉のもとの意味からすればどのような本性のヒュポスタシスであるかを限定せず、一般的に個の実体を意味するが、実際には慣用的な使用法によりヒュポスタシスは理性的本性のヒュポスタシスとしてのみ使用されている、と。

また何故、広義の個の実体、あるいは原義のヒュポスタシスに対して、理性的本性を持つものだけがペルソナ、あるいは慣用的な意味でのヒュポスタシスという特別の名称が必要とされるのか、という疑問に対して、トマスは第3異論解答で、<sup>(9)</sup>はじめにも述べたように、理性的本性を持つ個の実体こそが自体的に能動すると答えている。トマスは「ところで自体的に能動するということは、他の本性のものに比べ、より卓越した仕方では理性的本性を有する実体に適合する。というのも、理性的実体のみが、能動するかしないかが自らの内にあるという意味で、自己の行為の支配権を持っているのだからである。」と述べている。

## 第二章 ペルソナの定義と本性の存在様態

続く第2項の本文において、トマスはペルソナの定義について説明している。まず、実体の類において理性的本性を持つ個体に対してペルソナという特殊な名称が与えられることが適切であることを説明している。付帯性の場合、その一部が個体化される場合には、それが付帯している基体による。例えば「この白さ」というのは「この基体」にある限り

で言われる。従って付帯性にとって個体化の原理はそれ自身の内ではなく外部にある。しかしペルソナは実体であり、個の実体として他の実体から区別されるのはそれ自身の原理による。それは、一つには個的質料によるであろう。ペルソナとは第一章で見たように先ずヒポスタシスであり、ヒュポスタシスとして個的な質料を有し、個的な付帯性を伴うものであった。従って実体は第一実体である限り、どの個体もそれぞれ個体化されている。しかし、ペルソナは個的質料によって個体化されるだけでなく、さらにその本性からも特に個体化されたあり方を行うものが存在する。それは理性的本性を持つものであり、それらこそ自体的な能動性を発揮するのであり、それらにおいては質料の面からのみでなく、本性の側からも著しく個体化が進むことになる。

そもそも実体は自体的に存在する *per se esse* ものであり、自体的に能動する *per se agere* ものである。個的質料の観点からだけでなく、形相的な側面から、自体的な能動性を本性として示すものがあれば、それらこそ先ず実体的であると考えることができる。それらにペルソナという特殊な名称が与えられているとトマスは考えている。

トマスは本文において第1項で与えられているペルソナの定義が適切であることをここで次ぎのように説明する。

- ①「理性的本性を有する個の実体」(*hypostasis rationalis naturae*) というペルソナの定義にはペルソナの2つの固有性が含まれている。

ギリシャ語におけるヒュポスタシス、ラテン語における第一実体は実体の類におけるある特定の名称である。また、ペルソナは理性的本性を有するもののある特定の名称である。ペルソナは両方の特殊性を含むものである。

- ②「ペルソナが実体である」ということは「ペルソナは付帯性ではない」ということである。<sup>(10)</sup>ペルソナはあくまで実体であり、手や足などの部分がペルソナと言われることはない。

- ③「ペルソナは個の実体である」とは、類 (*genus*) や種 (*species*) などの普遍がペルソナではないということである。<sup>(11)</sup>

- ④「ペルソナは理性的本性を持つ」ということは無生物、植物、動物といった非理性的な個体はペルソナではないということである。<sup>(12)</sup>

このようにトマスの言うペルソナとは理性的本性を持ち、類や種といった普遍としての実体ではなく、第一実体としての個の実体であり、しかもそれはあくまで実体として全体であり、その部分ではないものである。しかし、トマスにおいては人間だけでなく、神と霊の実体とがペルソナに含まれる。すると「理性的」(*rationalis*) ということが神や天使に当てはまるのか、という異論が当然提出される。これに対する第10異論解答においてトマスは、理性的とは動物における種差であり、これは人間における推論的な認識を意味している。それゆえ天使と神の認識には当てはまらない。従ってボエチウスは理性的ということを知性的の意味と解釈している、と説明している。

ところでトマスは第1異論において、アリストテレスの「如何なる個物も定義されない。」という言葉を用い、ペルソナは実体における個物である故に定義不可能ではないか、という異論を提出している。この異論をめぐりペルソナにおける個体の側面と普遍の側面について異論解答において次のように分析を行っている。

- ・個の実体における3つの側面。<sup>(13)</sup>

- 1) 個体の内にある類的、種的本性として考察されることができる。
- 2) 類的、種的本性の存在様態 (modus existendi) として考察されることができる。個物における類や種は、多くのものに共通的なものとしてではなく、この個体に固有なものとして存在している。
- 3) そのような存在様態が原因される原理として考察されることができる。

・ 1) ～ 3) における共通性の状態は次のようである。<sup>(14)</sup>

- 1) 類や種の本性はそれ自身として考察されるならば共通的である。
- 2) 共通的な本性の存在様態もまた共通である。何故なら、プラトンにならって分離された普遍を認めるのであれば、実在する人間の本性はある特殊な個体の内にしか存在しない。特定の人間ではないような人間は存在しない。従って個物の内に実在的な普遍が存在し、その限りで存在様態は共通的である。
- 3) そのような存在様態の原理は個体化の原理であり、共通的でなく個々において別々である。この特殊なものはこの質料、かの質料において個体化されている。

・ 1) ～ 3) の名称は共通性に関して次のようである。<sup>(15)</sup>

- 1) 人間や動物などのように本性を意味する名称は共通的であり、定義可能である。
- 2) ヒュポスタシスやペルソナといった、一定の存在様態と共に本性を表示する名称も共通的で定義可能である。
- 3) ソクラテス、プラトンのように、その意味表示において一定の個体化の原理を含む名称は共通的でなく、また定義不可能である。

以上のように見ると、トマスにおけるペルソナとは人間という普遍的本性が、ある人間の内に在る限りでの存在様態 (modus existendi) を言うのであり、それは普遍的本性の個体化であるために共通性を持ち、従ってそれは定義可能なのだということが分かる。つまり我々人間がペルソナであるのは、人間という共通の本性が質料に受け取られて個の実体として存在しているが、人間という形相に基づいて、人間はより自体的な能動性を発揮するのであり、そのような人間としての共通の存在様態から、人間である各実体にペルソナという名称が与えられている。トマスは分離した普遍というプラトンの立場を退ける一方で、個的な形相の存在も認めない。それゆえ個の実体としての人間は、普遍的な形相を受け取ることで、その存在様態においてある普遍性をもつ。それは非理性的な存在者に比べて、はるかに自体的な能動性を示すことによりそれらから区別され、それゆえペルソナと呼ばれるのである、と説明する。

トマスはさらにペルソナによる実体の類の区別は類の種への区分ではなくて、存在様態による区分であり、それはアナロギアによる区分だとする。第6異論解答において次のように説明する。<sup>(16)</sup>

例えば、実体は第一実体と第二実体に分けられるが、これは類における種として分けられるのではなく、存在様態の違いに基づく区分である。つまり第一実体に含まれないものが第二実体に含まれるわけではない。第二実体は絶対的に考察されたものとしての類の本性を含むのに対して、第一実体は個的に存立するものとして実体を意味表示する。それゆえ類の分割というよりアナロギアによる区分である。

同様に、ペルソナは実体という類に含まれているが、それはその種としてではなく、存在様態の特定なあり方をするものがその名称によって呼ばれるのである。しかしその特

定のあり方というのは度々見てきたように自体的な能動性が顕著であるということである。自体的能動性は他の個の実体にも全て存在するものであり、それは自体的に在る *per se esse* ものとしての実体である以上、自体的に能動する *per se agere* ということが必然的に伴うからである。トマスは他の箇所では存在ということは実体にも付帯性にも共通に述語されるが、実体において第一義的に見出されると述べているが、実体という類において、理性的本性を持つものが特にペルソナという名称を持つのは、それらにおいて先ず実体が実体であるところの自体的な能動性が、従って自体的に在ることが認められるということの意味している。

### 考察のまとめ

以上のようにトマスのペルソナ論を見てくると、二つの側面が認められる。①ペルソナとはヒュポスタシスであり、個の実体であること。これはアリストテレスの実体の二分法の第一実体であり、ペルソナとは普遍としての実体ではないことが先ず明らかにされた。②ペルソナとは理性的本性を持つものの存在様態 (*modus existendi*) であること。これはトマスはプラトンのような分離された普遍の存在を認めず、普遍は個体の内にのみ存在するということに由来する。ペルソナは個の実体であるが、それぞれの個の実体は人間本性を受け取っているゆえにそれぞれの運動には一定の共通性が認められる。人間本性は個の実体において個体化されているが、存在様態において共通性を持っている。

存在様態は個々の人間において、自体的な能動性における共通の卓越性として現れるが、人間と他の非理性的な存在者とは種的に区別されるのではなく、アナログ的に区分されるのである。従って、実体とは本来、自体的な存在を持つものであり、自体的な存在とは自体的な能動性を持つものであるとすると、トマスは理性的な存在であるペルソナにおいてより先に実体が認められると主張していることになる。さらに理性と区別される意味での知性をもつ天使、神のペルソナということを考えると、そこに神を第一とする存在の秩序が見えて来る。

このように見ると、トマスのペルソナ論は、①ヒュポスタシスというアリストテレス的な側面と、②ペルソナというプラトンの普遍の分有という二つの側面を存在様態という視点から総合しているということが見えてくる。しかし、この問題はもう少し広い視点から再度検討されなければならないであろう。

### 註

- 1) テキストはマリエッチ版を用いた。
- 2) ὑπὸ στήθεσσι...この語の辞書的な意味は「底にあるもの」that which settles at the bottom.である。そこから「下にあるもの、支持」anything set under, a support.といった意味が生じた。さらに哲学的な用語として「自存体、実在、実体、自然、本質」subsistence, reality, substance, nature, essence.といった意味が派生してきた。(A LEXICON Abridged from Liddell and Scott's Greek-English Lexicon, OXFORD)。ラテン語の「ペルソナ」(persona)は、周知のごとく舞台でつけられる仮面、マスクの意味であり、そこから役割、人柄、さらに人格などの意味が派生した。
- 3) 「実体というのには二つの意味があることになる。すなわち、その一つは、もはや他のいかなる基体の述語ともなりえない窮極の基体であり、他の一つは、これと指し示されうる存在であり且つ離れて存しうるものである、一すなわち各々のものの型式または形相がこのようなものである。」(アリストテレス

『形而上学』第5巻。出隆訳)

- 4) *De pot.* q.9, a.1, c. Patet ergo quod hypostasis et substantia differunt ratione, sed sunt idem re.
- 5) *ibid.*, Essentia vero in substantiis quidem materialibus non est idem cum eis secundum rem, neque penitus deversum, cum se habeat ut pars formalis;
- 6) *ibid.*, Persona vero addit supra hypostasim determinatam naturam: nihil enim est aliud quam hypostasis rationalis naturae.
- 7) *ibid.*, arg.1, Dicit enim Augustinus in VII de Trin., quod idem intelligunt graeci cum confitentur in Deo tres hypostases, et latini cum cofitentur tres personas. Ergo hypostasis et persona significant idem.
- 8) *ibid.*, ad2, hoc nomen hypostasis, in graeco ex proprietate significationis habet quod significet individuum substantiam cuiuscumque naturae; sed ex usu loquentium habet quod significet individuum rationalis naturae tantum.
- 9) *ibid.*, ad3, Hoc autem quod est pre se agere, excellentiori modo convenit substantiis rationalis naturae quia aliis. Nam solae substantiae rationales habent dominium sui actus, ita quod in eis est agere et non agere;
- 10) *De pot.*, q.9, a.2, c., Per hoc ergo quod dicitur substantia, excluduntur a ratione personae accidentia quorum nullum potest dici persona.
- 11) *ibid.*, Per hoc vero quod dicitur individua, excluduntur genera et species in genere substantiae quae etiam personae dici non possunt;
- 12) *ibid.*, per hoc vero quod additur rationalis naturae, excluduntur inanimata corpora, plantae et bruta quae personae non sunt.
- 13) *ibid.*, ad1, ergo dicendum quod, in substantia particulari, est tria considerare: quorum unum est natura generis et speciei in singularibus existens; secundum est modus existendi talis natura generis et speciei, ut propria huic individuo, et non ut multis communis; tertium est principium ex quo causatur talis modus existendi.
- 14) *ibid.*, Sicut autem natura in se considerata communis est, ita et modus existendi naturae; non enim invenitur natura hominis existens in rebus nisi aliquo singulari individuata: ...Sed principium talis modi existendi quod est principium individuationis, non est commune; sed aliud est in isto, et aliud in illo; hoc enim singulare individuatur per hanc materiam, et illud per illam.
- 15) *ibid.*, Sicut ergo nomen quod significat naturam, est commune et definibile, – ut homo vel animal, – ita nomen quod significat naturam cum tali modo existendi, ut hypostasis vel persona. Illud vero nomen quod in sua significatione includit determinatum individuationis principium, non est commune nec definibile, ut Socrates et Plato.
- 16) *ibid.*, ad6, cum dividitur substantia in primam et secundam, non est divisio generis in species, – cum nihil contineatur sub secunda substantia quod non sit in prima, – sed est divisio generis secundum diversos modos essendi. ...Unde magis est divisio analogi quam generis. Sic ergo persona continetur quidem in genere substantiae, licet non ut species, sed ut specialem modum existendi determinans.